たものと思いました。全体的にはシステムの改善など課題も明らかになりましたし、参加した皆さんの評価・意見も100点満点とはいきませんが、やれば出来る、萎縮して意気消沈しておらず、出来ることを工夫して行動に移していくそんな知恵と勇気と行動が今なにより肝心なのだという事を再確認させてくれました。今後は「東明未来塾本部コース」に地区からもZoomを活用してリモートで参加する、そんな一本化した併用型の研修会も検討されています。

私たちはコロナに脅かされ続けたこの2年あまり、確かに歳を取った、楽しく、充実していた毎日が封鎖され、折角の会合も中止続き、そのようなことが長く続いていると自然と情熱を失い、退会につながるという悲しい連鎖が拡がっています。「年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る。」という詩の一節を思い出しました。いつまでも元気でイキイキと暮らしていくためにも、肝心なのは希望を見失わず毎日を前向きに生き抜いていくことだと改めて強く思います。

「天意夕陽（せきよう）を重んじ、人間晩晴（ばんせい）を貴（たっと）ぶ」

昨年のNHK大河ドラマで話題となった渋沢栄一は天保11年に生まれ昭和6年に91歳で没するなど随分長生きした人ですが、生涯を「忠恕」（物事に真心を尽くし、人に思いやる）の精神を貫き通し「己の為より公の為」という考えを実践に移してきた人、何より生のある限り人に尽くそうとしてきた人でした。年譜を見てみると実業界での活動は70代を前にほぼ終えているがその後は、83歳で二松学舎で論語の講義をしたり関東大震災の際は様々な義捐活動に奔走している。最晩年の90歳の時に起こった昭和恐慌の際は風邪を引いて寝込んでいたのを陳情にやってきた人と面会し解決に尽力したとあります。そんな渋沢栄一が晩年に好んで揮毫したという言葉が「天意重夕陽　人間貴晩晴」。一日を懸命に照らし続け、西の空を茜色に染めて沈んでいく夕日の美しさは感動的なように、人間もまた、若い頃はもてはやされながら、晩年は見る影もないといった早成の人生ではなく、年とともに佳境に入り、晩熟、晩晴していく夕日のような生き方が貴い、ということを、この言葉は私教えてくれています。

最近よく耳にすることが、歳をとったので詩吟を辞める・会を解散する・退会する等を聞く。これまで人生の生きがいとして楽しんできた詩吟・詩吟の仲間と決別するのはいかがなものか、晩年に円熟した人生を送れるよう、詩吟の仲間と楽しい日々を過ごしていただきたい。高齢になった今こそ、仲間と楽しい教室作りで生きがいを見つけて欲しいとつくづく思います。

以　上